

## 「普通」って何？

校長 武井 正明

少し肌寒い日曜の朝。偶然点けたテレビ映画に釘付けになった。

魚類学者でありタレントでありイラストレーターかつ東京海洋大学の客員教授「さかなクン」の半生を描いた「さかなのこ」2022年、今から4年前の作品だ。

魚一筋の主人公「ミー坊」を、のんが見事に演じていた。

ミー坊は幼少時から、生活の総ての興味関心は魚。あまりののめり込み様に、父親は将来をとて心配する。しかし、母親は「いいじゃないですか」とミー坊の興味関心を第一にして、いつもミー坊の味方であり、応援団長だった。

あくまで映画だから、事実そのままではないだろうが、それを差し引いても、ミー坊がいろんな人達との出逢いや繋がりを基に、自分にしか描けない人生を、迷わず楽しく歩んでいく姿に感動した。

何をして上手くいかず、無職になったミー坊を観賞魚の店長さんが雇ってくれる。

そこに、住む家をなくした小学校の同級生母子が、ミー坊の部屋に転がり込んでくる。その同級生がふと「私たち、普通じゃないよね」と奇妙な同居生活を、自嘲気味にミー坊に訊く。ミー坊は、真っ直ぐに彼女を見て「『普通』って、何？」と問い返す。

そう、私たちの考える「普通」って何だろう。それはあくまで、人間が個々に生きてきた、限られた時間で作られた価値基準であり、概念に過ぎない。

そして「さかなクン」のように、それまで変わり者と揶揄されていた人が、世間から一旦認知されると、途端に「新たな常識」に豹変してしまったりする。大谷翔平の二刀流の世間の掌返しなど、あまりにも露骨で酷かった。

それは人間社会だ。最低限守らなければいけないルールは、当然ある。私はそれを「他人に迷惑を掛けない」の一点のみだと考えている。

他人に迷惑さえ掛ければ、皆それぞれの、やりたいことや興味のあるものに、自由にのめり込んでいくことは、寧ろ積極的にやっていくべきじゃないだろうか。

観終わると、曇り空だったが晴れやかな気分になった。映画や本というのは、人の気分だけではなく、人生さえも変える力があると、あらためて思う。

明後日出逢う、新たな196の個性たち。私は196人の可愛い孫たちだと思って迎えたい。それぞれの個性が、キラキラ輝く毎日になるよう「さかなクン」のお母さんのように応援したい。

早く木曜日にならないかな。もうワクワクしかない。